

## 嶺 南 考

——秦より漢初期の南シナ——

手塚 隆 義

シナ本部は、従来一般に黄河流域地方を云う北シナと、揚子江の流域および流域以南の全域をふくむ南シナとに分けられてきた。もともと、この南・北シナの分類は必ずしも文化とか歴史とかに適用されるわけではないので、たとえば江蘇・安徽・湖北三省の北部のときは、地理的には南シナに属してはいるものの、北シナの色彩を帯びていることは、夙に桑原博士の指摘せられた<sup>(1)</sup>ごとくである。しかし、大体に於てシナ本部の南と北とは、地理的には云うまでもなく、氣候・産物ひいては住民の性格にいたるまで対蹠的であつて、従つてこの分類は、クレツシイ教授の強調せらるる<sup>(2)</sup>ごとく、妥当である。

41 嶺 南 考

しかし、南・北シナの分類に対して、南シナと呼んだ地域を更に二分して、揚子江流域を中部シナとし、その南の福建・広東・広西の三省方面を南シナとし、従来の北シナに加えて北支・中支・南支と三分することが行われてきた。その分類の行われるようになった時期や動機、またはそれが歴史以外の学術上の立場からも是認されるものか否か、については全く無智である。ただ自分は、この分類が歴史的にみて、可成り妥当なものではないか、と考へるの

である。

南シナは、揚子江流域と山脈を以て区劃せられた、古くより五嶺以南の意味で嶺南とか、嶺外とか、または、嶺表とか呼ばれた地域である。五嶺は(3)江流域より南に達するのに越えた五つの峠を指す称呼である。すなわち五嶺を越えれば南シナであり、氣候も古く中原の人士が江流域を卑湿と云ったのに対し、暑熱である。五嶺の一つである大庾嶺(梅嶺)について、「大庾、梅多し、南枝はすでに落つるも、北枝は方に開かんとす云々」(4)と云う程の差違があるのである。

## 二

歴史の上よりみれば、黄河の中流域に発祥したシナ文明は、シナ民族の発展進出に伴って、周囲の民族に光被し、また同化した。北への発展は山西省・河北省の北部に達するおよんで止まった。蒙古は農耕民族たるシナ人の発展を許さなかつたからであり、この限界を示したのが、戦国燕・趙・秦などが築いた長城である。元来、蒙古の遊牧民族を防禦する為に築造せられた長城は、華・夷の二世界を劃する政治上の境界であるとともに、シナ民族の北方への発展の限界を示したものであつた。同時に南へ進んでは揚子江流域へ発展し、江中流の現今の苗族などに最も近縁な住民(5)による楚の建国をみた、楚はシナ文明の刺激によつてできた国である、楚は中原の人士に楚蛮と卑しめられつつも、その撲強な国がらで大をなした、つづいて影響は江の下流域におよび、江・浙の地に呉とか越とかの建国をみるに至り、それらの国々が中原の争覇に参与するに至つたのである。大体西暦前八世紀より前三世紀にかけて、いわゆる春秋戦国時代と呼ばれる時期のことである。もとより江流域の土着民族がシナ文明の光沢を受けて開化

するとともに、シナ人も大いに移り住んで、この地方が全くシナ化してしまふには長い期間を必要とした(6)。しかし、シナ民族の旺盛な発展が一応この方面に止まって、順調に更に南方に延びず、南が化外の地として遺されたのは、連互した山脈が自然の障壁をなして、シナ人の発展を阻んだからである。したがって五嶺を以て代表さるる山脈は、北に於ける長城と同じ役割りを果たしたのである。秦始皇の対外政策をのべて

南は五嶺に成し、北は長城を築きて、以て胡・越に備う(7)

などと云つて、始皇が戦国燕・趙・秦の長城を連結しての万里長城の築造と守備と嶺南の経略とは、民力を罷らせた暴政として並称されるが、長城と五嶺とが南北で同じ意義をもっていたことを示すものでもある。

しかし、福建省や広東省の省境に連なる山脈が、シナ民族の発展を阻む障害をなしたとしても、揚子江の流域に進出したシナ人が、嶺南の地と全く無関係であつたわけでは無い。南海に産する珍貴な貨物、珠を始めとして、越の——シナ人は于闐に産する玉を、仲継ぎした禺氏に産すると考へ、「禺氏の玉」と呼んだように、越すなわち嶺南が産地と考えていた——犀角・象齒・翡翠が(8)、古くより中原に齎らされているのである。したがって南海の物産の集積地として古くより番禺(広東)が繁栄した(9)のである。史記・貨殖列伝には、番禺を九疑(湖南省寧遠県の南)以南の一都会として

珠璣・犀・瑇瑁・果布の湊なり

と云ひ、漢書・地理志の粵地の条に

処は海に近くして犀・象・毒冒・珠璣・銀・銅・果布の湊るもの多し。中国の商賈する者、多く富を取る。番禺はその一都会なり

とみえるのは、番禺の商業都市としての性格を示すとともに、シナの商人が往来して商売していたことを示している。番禺が富を取る絶好の交易場であったから、ここに都した南越国なども豊かであったのであろう。南越王趙陀が漢文帝に白璧一雙・翠鳥千・犀角十・紫貝五百・桂蠹一器・生翠四十雙・孔雀二雙を献じた<sup>(10)</sup>ことや、漢高祖の命で南越国に使ひした陸賈が、王の趙陀より「橐中の装値千金」「他送も亦千金」を贈られ、後にその装を千金に売却して諸子に与え生産の資本とせしめた<sup>(11)</sup>話などは、番禺に於ける利に依つて南越が殷富であつたことを語つてゐると思ふ。

古くより南海の物産が中原に齎らされていることより考えれば、シナの商人が嶺を越えて番禺に趨むいたことも、可成り以前からであろう。藤田博士の研究に依れば、漢代シナ人の南海に関する知識は、スマトラ島の西北岸やインドの東岸、またはイラワヂ河の上流地方にまでおよんでいる<sup>(12)</sup>。もとより、漢代に初めてこの方面と番禺との交渉が始つたのでは無く、それ以前よりそれら各地の物産が番禺に搬ばれていたのである。してみれば、かかる番禺に聚積された南海の物産が、嶺を越えて先づ揚子江流域へ運搬され、シナの商賈達が往来する路が、当然早くより開かれていた筈である。

### 三

嶺南地方を劃する山脈が、たとへ一たびはシナ民族の進出を阻んだにせよ、南シナがいかに多くの困難な条件にあるにせよ、蒙古のごとくシナ人の移住の全く不可能な土地ではない。いわんや番禺のごとき巨利を博するに好適な中心地の魅力がシナ人を、ひきつけるに於てはなほさらである、秦始皇・孝武の経略は、かかる点に発する。

秦始皇は西曆前二一四年（始皇三十三年）に嶺南に兵を加えて、南海・桂林・象の三郡を設置した<sup>(13)</sup>。しかし後に漢武帝が置いた朝鮮四郡が韓・穢人を刺激して激しい抵抗を受けたように、越人の攻撃を誘発した。始皇が嶺南を経略した経過は、おそらく江西・湖南の方面より、広東省に軍を進めたのであろう<sup>(14)</sup>が、具体的には知ることができない。L. Auroseau 氏はこれを詳述せられている<sup>(15)</sup>が、氏の採りあげられた淮南子・人間訓に見える記事は、三郡の設置されて後に越人の執拗なゲリラ戦が行われて、秦の尉の屠睢が殺される大敗を招いた<sup>(16)</sup>ので、これに備えるために益々屯戍を發した状況を記したものではなからうか。秦の経略は嶺南全域におよんだのでは無く、重要な地点を抑えて郡を置いたのであるから、越人の反撥攻撃の前に曝されて、遠隔の地であることと相対して、苦心努力の結果存続し得たことは当然であらう。しかし、統一早々にして大事業を強行し過ぎた為に胚胎した秦の矛盾は、南海郡に敏感に伝わり、頭官任囂の野心を育成することになり、かくて秦末の乱に乗じた囂の意志を體した竜川の令趙陀の独立、南越国の建国をみるに至った。

趙陀は、任囂が平素抱いていた野心を彼れに依って実現しようと呼望した人物だけあって、才略手腕に秀れていいた。始皇が嶺南に出兵して三郡を設置し、その後たとへ懸命の努力をはらったにせよ、ゲリラ戦に会いながらも存続し得た主因は、越人が散居し、いわゆる「百越」の状態で、必ずしも政治的に鞏固な結果をとげていなかったからであらう。同じく始皇が、北狄匈奴を蒙恬に依ってオルドスから撃退したのが、蒙古の遊牧部族が結集連合して匈奴ウルスを形成する以前であったこと、と同様である。このような状態にあった越人を、完璧とは云へないまでも「百越を和集し」て<sup>(17)</sup>、南越国の建国に成功したのである。南海郡に拠った彼は、迅速に秦吏を誅して、己れの党を以て後に据えるとともに、己に秦が滅びると桂林・象郡を撃ち、自立して南越に王となった。桂林郡や象郡は秦の滅亡

とともに、越人の侵寇の前に没し去ったのかも知れぬ。それならば趙陀はこれを撃つて併せ、南越国の成立をみたたであつて、黄屋左纛し制を中国と等しくし南越武帝を称して、嶺南に小シナ帝国を築き、長沙方面を侵しながらも漢より責讓せられれば、「老臣、妄りに帝号を竊み聯か以て自ら娛しむのみ」とか<sup>(18)</sup>、「老夫、死すとも骨腐らざらん、号を改めて敢て帝と為らざらん」と<sup>(19)</sup>謝罪し、卑下して「蛮夷の大長老夫大臣」と称し<sup>(20)</sup>ながら、国にあつては故の帝号を称してはばからぬ程の柔軟性のある不即不離の外交を以て、漢に対したのである。しかし、趙陀が老獮かつ越人を統治結集する手腕——後の呂嘉の属したとき越人の豪家も統御したのであろう——が秀れていたにせよ、且つ漢が初期には国内に多くの難問を抱いていて、外部に対し積極的な行動が起しえなかつたにしても、よく約百年間独立を維持し得たのは、南越の地が連互する山脈によつて、江流域と隔離された別天地であつた、ことに依るのである。

番禺は山を負いて險阻なり、南海は東西数千里あり。頗ぶる中国の人有りて相輔けなば、これまた一州の主たらん、以て国を立つべし

と云う任囂が趙陀に説いた言<sup>(21)</sup>は、囂に独立の決心を惹き起さしめた根本的な理由であつたし、また秦との「道を絶ち兵を聚めて自ら守れば」以て、忽ち南シナが本国とは分離して別乾坤を樹立し得る地理的条件にあつた、ことを示しているのである。

したがつて南越国が独立すれば、天然の要害は漢の勢力が容易にこれを征服することを許さなかつた。「区々たる越」などと云うものの、呂后の遣した隆慮侯竈の漢軍は、晁湿に会つて士卒の疫病に罹る者が多く、遂に嶺を越へずして止み<sup>(22)</sup>、武帝は南越討伐を申し出た卜式を嘉賞し以て士気を奮立たせたが、百人の列侯の内にこれに応ずる

者とても無った<sup>(23)</sup>のである。

## 四

先秦時代に、まづ揚子江流域地帯と南シナとを通ずる道はどのようであったか、番禺に集まる南海物資が北へ搬ばれ、商人達も往来したとすれば、そこにたとえ縷のごとき道でも開けていた筈である。西方より「絹の道」が黄河中流域へ通じていたならば、南方よりは「珠・象牙の道」とも呼ぶべきものが、あったとしても怪しむに足り無いのである。

揚子江流域と番禺（広東）を結ぶには当然、湖南・江西二省と広東省との境をなしている都龐嶺・諸広・大庾嶺・九連の諸山脈を越へねばならないが、これらの山脈は、江に注ぐ湘江・贛江の二大川と、広東で海に入る粵江（珠江）の支流との分水嶺をなしている。おそらく古く彼我の交通は、この川を遡り又は川に沿って上り、分水嶺を越へて彼方の川の水源に出て、流れに従って下るのであろう。古くより呼ばれ、広く中支と南支との境界の意味に使はれるようにもなった「五嶺」とは、このようなそれぞれの往来の要衝に当った分水嶺上の峠の名称であったに相違ない。

揚子江の流域で古く栄えた場所は、戦国楚の都であった郢（湖北省江陵）などともに、湘江に沿った長沙（湖南省長沙県）、贛江の予章（江西省南昌県）をあげねばならぬ<sup>(23)</sup>。

長沙は「卑湿にして寿長きを得じ」<sup>(24)</sup>などと云はれながらも繁栄し、秦の長沙郡治の所在地であり、漢初は功臣呉芮が封じられ、嗣絶えて後は漢室の一族の封じられたところである。長沙より湘江に沿って南し、衡山・雷溪を経て衡陽より湘江の支流来水を上り、柳を経て五嶺の一つと云われる騎田嶺を越え、宜章を経て広東省に入り、北江の支

流武水の上流に出る、武水により曲江を経て北江に入り、南して広東に達するので、いま粵漢鐵路の通ることの道は、長沙と広東を結ぶ最短距離である。

しかし、これに対し郴より騎田嶺を越えて広東省の連州江（湟水）の上源に出て、連を経て南し英徳の南の連江口で北江に入り広東に達する道が多く使われたらしい。西暦前一一二年（元鼎五年）の南越征討に際し、路博徳が桂陽（郴）より發して匯水（湟水・湟水）を降つて番禺を目指した進軍路はこれであろう。

この通路の東にあつては、南昌より広東に達する路である。南昌より贛江を遡り、吉安・贛州を経て、支流の章水を上り大庾嶺（梅嶺関）によつて広東省に入り、潯水の上源に出て、南雄・始興を経て北江に出るものである。武帝の南越征伐の際に、予章を發した揚僕は、潯水すなわち横浦水を下り、曲江（韻関市）で北江に入り、かつての始興県にあつた尋峽を陥れ、石門を破つて越の船粟を捕獲し、連江を降つて来る路博徳の軍と合流すべく、連江口で待ち受けたのであろう。

また、予章と嶺南との關係で重要な点は、閩越に至る路が通じていたことである。広東省の越人が南越と呼ばれていたので対し、福建省の越人は閩越と呼ばれ、とくに閩江（建江）の河口に当る東冶（福州）は、閩越王の治するところであつた。もとより番禺ほどではなかつたにせよ近隣の物産が聚まり、閩越の一中心をなして南シナの沿岸では番禺に次ぐ繁栄をみせていたのである。東冶と江流域とを結ぶには、南昌より武夷山を越へて閩江の上流に出る——南昌より撫水を遡り武夷山脈を杉嶺あたりで越へ、閩江の支流の富屯溪か崇溪かの上源え出たのであろう——通路があつたと思われる（25）

以上の路の外に、最も西にあつて広東に達するのは、長沙より湘江を遡り、上流で右折した本流に沿つて零陵を



經て、都龐嶺を越へて広西省に入り、全や興安・桂林を経て桂江により梧州に出で、西江によって達するものである。南越征伐に際して、戈船・下厲二將軍が、零陵より出て或いは離水を下り、或いは蒼梧に抵つた、というのはこれ、前者は湖南永州府（零陵）より桂林あたりで灘水（離水）を遡ほり桂江によって梧洲（蒼梧）に達し、後者は桂林より更に西して柳江に依り桂平（潯州）を経て蒼梧に抵り、兩軍合流して番禺を目指して東進したものである（26）。

江流域の長沙・予章と番禺を結ぶ路としては、今まで述べ来たた数路が開けていたと思われる。しかし、最初の長沙より武水に出る路は、番禺に達する最短距離ではあるが、開けたのはやや遅かつた（27）といふので、長沙より広東省の連州江、または広西省の桂江の上流に出て、それぞれ川によって南するものと、予章より広東省の湑水の上流に出て、北江を利用するものとの三路が、主要路として広く用いられたのであろう。すべて武帝が南越討伐に際し、番禺を目指す諸將の進軍路となつたものであるが、韓千秋の失敗に懲りて十萬を動員し<sup>28</sup>、万全を期した王帥堂々の進軍路が、古くより開かれて當時に至るまで最も多く利用せられていたものに、依つたことは疑ひ無いのである。

## 五

嶺南が山脈に依つて隔てられて、一地域をなしていたのは、山東または江・浙の方面より沿岸に沿つての海路が、頗ぶる拓けていなかったからである。大陸の民であるシナ人は、交通路として河川を利用し、運河を開いて川を連げたり、狭隘の谷を開鑿したりして交通に便ならしめることには頗る長じているが、海洋を航することは特技では無い。それに較べれば越人——とくに海浜に住んだ——は海上を行くことは、はるかに優つていたであらう。漢の南越

征伐の際に、閩越王無諸が漢軍に応じて出兵し、福建省の南岸を航して番禺に向ったが、揭陽（広東省揭陽県）に至って風波のため進み難いのを口実として、形勢を覬望していた<sup>29</sup>ことなどは、それを証するものである。これに対し漢の海軍は、南越討伐の後に東越を討ったときに、横海將軍韓説が句章（浙江省慈谿県）より海路を浙江・福建の沿岸を航して閩越の境に入り、陸路の漢軍が未だ到着せぬうちに閩越王余善を殺した居股等の降を受ける功を立てている<sup>30</sup>が、おそらくは閩越は山険を扼して防ぐことを主とし、海路来征することを予期しなかつたのであろう。しかし、漢としては思はぬ効を奏したというべきで、主力が武夷山を越へて進む陸軍にあつたことはいうまでもない。前年の南越征伐には海軍は全く使はれていないのである。この軍功によって韓説は案道侯に封じられた<sup>31</sup>が、この名称は未だ拓かれていない新海路を按じ拓いた、すなはち察行した意味で、附けられたものではなからうか。いずれにしても、この頃までシナ大陸の沿岸を南下して、番禺はもとより東冶に達する海路は、充分拓けていなかったのであろう。

海路が以上のような状態であつたから、専ら陸路に依つたことは当然であるが、元來路が川に沿って上り、分水嶺を越へて彼方の上流に出て、それに沿って下ることに依つて往来が始まつたものであろうから、河川が交通運輸に果した役割りは、頗る大きかつたであらう。

南越征伐に際して、武帝は西南夷夜郎の住地である貴州省遵義方面より南して牂牁江（北盤江）によって、すなはち都泥江より北盤江に入り西江を下つて番禺を襲はんとした。その動機は西暦前一三五年（建元六年）に東越を撃つた王恢に命ぜられて南越を暎しに趨いた唐蒙が、蜀（四川省）に産する枸醬を饗せられ、長安に帰つて蜀の商人に問ひ、枸醬が蜀より夜郎に売却せられ、南越は財物を以て夜郎を役属していたので、牂牁江により番禺に搬ばれている

ことを知り、武帝に対し南越征伐の進軍路として提案したのに依る<sup>32)</sup>のである。唐蒙は命じられて巴蜀・笮より入り夜郎侯多同に会い諭し従はせ、さらに牂牁江を指して道を開き、南越が叛すると兼てよりの巴・蜀・夜郎の兵を以て牂牁江より番禺に向う案を實行しようとしたが、土人の叛抗により期遅れて間に合はなかつた<sup>33)</sup>。しかし、この路は前に述べたものに比べれば遙かに遠く、かつ未だ完全に服従していない四川省南部を過ぎねばならぬ。西南夷の征服は司馬相如等の努力を以てしても非常に困難であつたのである。

しかし、武帝が唐蒙の建策を容れたのは、身毒(インド)へ達する道を求めて西南夷を経略したごとく、未知の世界に達する新しい道の発見に強い関心を有つていたのにも依るのであるが、すでに南越征伐を決意していた帝を動かしたのは、唐蒙の言にみえる

船を牂牁江に浮べて、その不意に出でなば、これ越を制するの一奇なり

という南越国の意表を衝く策戦上のこともあろうが

今、長沙・予章を以て往かば、水道の絶ゆる多く、行くこと難からん

といひ、牂牁江については

牂牁江は広き数里ありて、番禺の城下に出づ

とか

夜郎は牂牁江に臨めり、江の広さは百余歩ありて、以て船を行るに足る

というにあつたらう。この四川・貴州方面より牂牁江を利用する路は、江の流域より広東に達するにはあまりに迂遠ではあつたが、なをこれを利用しようとしたのは、前にあげた数路が決して便利で無つたことを示すものである。

しかし、専ら湖南・江西の方面より広東へ、あるものは広西を経て広東へ、達するのが往古の路とすれば、これらはいずれも川に沿って拓かれたもの、仍はち川に沿って上り省境の分水嶺を越へて、彼方の川の上源に出て川に沿って下るのである。そして、この川が交通・運輸に多く利用せられたのであろう。

唐蒙は牂牁江の水の豊富なことを説ひて、利用すべきを勧めたが、南越の征討に際し

江・淮以南の楼船、十万の師をして往いて之を討たしむ

という、「伏波將軍」路博徳、「楼船將軍」楊僕、故の帰義越侯二人が「戈船・下屬將軍」<sup>(34)</sup>などという將軍達に冠せられた名称が、この時すべて水路を進んだことを示している。後に楊僕がやはり楼船將軍として斉より渤海に浮んで朝鮮の征討に趨むている<sup>(35)</sup>のは、このときの経験を買われたものであろう。武帝は夙に南越征伐の準備として、上林苑の昆明池を修築し、楼船を造つて水戦を習はせ<sup>(36)</sup>ているし、斉の相の卜式は

臣、願くは父子もて斉の船に習へる者と、往いて南越に死せん<sup>(37)</sup>

といひ、武帝を感激せしめているのである。もとより越の方でも船を用いたことは、北江に乗り入った楊僕が南越側の船粟を捕獲している<sup>(38)</sup>ことで明かである。

このように河川が交通路として使はれば、重要な交通路として、河川の修理開鑿が行はれたことは当然である。とくに戦時の食糧・兵士の輸送に於ては尚更で、嚴安の上書には

また尉佗・屠睢をして、楼船の士を率いて南のかたなる百越を攻めしめ、監祿をして渠を鑿つて糧を運び、深く越に入らしむ<sup>(39)</sup>

とみえるが、河川を利用する以上、このときに限ったことではあるまい。

このように考えてくると、番禺と長沙・予章、嶺南と江の流域とを結ぶ交通路は、河川を主として利用し、いくつかは開かれてはいたが、困難であつて彼我の往来は決して容易ではなかつたのであり、したがつて嶺南は江流域と隔離され、長期に亘つて別世界を形成したことが了解される。

ために南越国の成立後はシナとの貿易も、漢が北方の匈奴に対し、長城を境界としてその一定の場所に「関市」を設けて有無の交換を行ったように、国境である嶺上に「関市」を設定し貿易せしめたのである。呂后の代に有司達が請ふて、関市に於て交易品としての鉄器を田器・馬牛羊などと共に禁制した<sup>(40)</sup>ために、王の趙陀は境を接している長沙王の建策と思ひ込み、長沙の辺邑を寇したことがある。また南越の叛したときに、討伐の先鋒をつとめた韓千秋を奇計を以て敗死せしめた南越の宰相呂嘉が、漢の使者の節を函封して、「塞」上に置いて漢を擲つたのも、このあたりであろう。関市は南越・匈奴ともに無統制な交易が、紛擾を惹き起すのを防止するためであろうが、一つには輸出品に統制を加え、他国の強大化を阻止するためで、匈奴との関が「馬弩関」と呼ばれ一定の馬や武器を禁制品としたように、南越に対し鉄の輸出を禁止した<sup>(41)</sup>のである。西暦前一一三年（漢元鼎四年）に南越王嬰齊は、使者を遣して漢の使者を送るとともに内属を願ひ、同時に「辺関」の撤廃を懇請した<sup>(42)</sup>のである。これを以て考えれば、南越国はシナが漢代すでに鉄器時代に入つていたのに対し、北方の匈奴が青銅器文化の段階にあつて、西暦八十三年の馬努関の廃止に依つて鉄器が普及するに至つた<sup>(43)</sup>ごとく、鉄器は専ら漢に仰ぎ、一般には青銅器が行はれていて、未だに青銅器文化の段階にあつたのであり、文化に於ても江流域とは違つた世界として存在していたのである。

以上のごとく考察してみると、冒頭に述べたように、河・江の流域地帯に対して五嶺が嶺南地方に果たした役割りは、万里の長城が蒙古を劃して為したそれと、頗る相似している。

しかし、たとへ嶺南は瘴烟の地であるにしても、ゴビ砂漠や草原のようにシナ人の移住発展を、全たく拒否することとは無い。漢の武帝が南越国を滅ぼして郡県を設けてより、政治的にシナ民族の南下を拒むことは無った。それにも関はず嶺南が中原と同様に開発されて、名実ともにシナの内地の一部となるのには、数世紀または十数世紀の長い期間を必要としたのである。福建省が開けたのは南宋の臨安（杭州）に奠都してよりであり、広東省のシナ化は唐代大いに進み、広西省に至っては元・明または清朝に至って始めて成ったといはれる。

思えばシナ本土の広大なるとはいえ、旺盛なシナ人の発展力・同化力を以てして、なお嶺南がこのように長期に亘って、開発を遅らせていたことは、やはり古く秦・漢の時代より嶺南は「外粵」として地理的に一地域を形成していたことに由来するのであらう。

唐の岑参の「張子が南海に尉たるを送る」の詩に

南州の尉たるを扱ばざりしは、高堂老親あればなり。樓台・厯氣重なり、邑里鯨人に雜はる。海は暗し三山の雨、花は明かなり五嶺の春。この郷に宝玉多しと、慎んで清貧を厭ふ勿れ<sup>(4)</sup>。

と。以て唐代に於てすら中原の人士が、嶺南をいかに視ていたか知るべしである。あながち詩人の繊細な感情の発露とのみ、解してしまうわけにはいかないと思うのである。

（昭和三七・一・廿日）

- 註(1)「晋室の南渡と南方の開発」(東洋史説苑) 一〇〇—一頁
- (2) 支那滿州風土記(高垣勳次郎氏訳) 第一章・四・北部と南部一三—一八頁。本書は G. B. Cressey; China's Geographic Foundation. 1933. の邦訳である。
- (3) 五嶺の現在の位置については、L. Arousseau 氏著・馮承鈞氏訳(秦代初平南越考・第一章・平南越前之中国南境)に詳細な研究がある。同書は *La première conquête chinoise des pays annamites (Ile Siècle avant notre ère)*. BEFFO, tom. XXIII, 1923. の漢訳である。
- (4) 唐宋白孔六帖・卷第九・梅・南枝の条
- (5) 和田清博士「周代の蛮貊について」(東洋学報・二九卷三・四号) 三二—九頁
- (6) 和田清博士「東亜民族發展史序説」(東亜史論叢) 四四〇—二頁 楚がシナ化した漢以後にも、その残部がなを蛮の名を負っており、三国の呉や南朝宋が討伐を試みている。
- (7) 漢書・卷二七・下之上・五行志
- (8) 淮南子・卷一八・人間訓
- (9) 松田寿男博士「禺氏の玉と江漢の珠」(東西交渉史論・上) 一七三—一五頁
- (10) 漢書・卷九五・兩粵
- (11) 史記・卷九七・陸賈
- (12) 「前漢に於ける西南海上の記録」(東西交渉史の研究・上)
- (13) 異説のあつた始皇の嶺南経略の年については、始皇三十三年(西曆前二一四年)であつたことが、河原正博氏の論文で決定している。「秦の始皇の嶺南経略——その年代を中心として——」(法政大学文学部記要・一・史学(1))
- (14) 桑田六郎氏「南洋上代史雑考・一・秦の三郡と漢の九郡」(大阪大学文学部紀要・第三卷) 一頁
- (15) 註(3)第三章・轉子史文・四四—四七頁
- (16) 河原氏は、これを始皇三十五年(西曆前二一二年)に当てられ、淮南子に見える記事を、五軍の配置を記したものと解されている註(4)。まさに記事中の鐘城の嶺、九疑の塞、番禺の都・南野の界・余干の水、などと云う名称は、秦の五軍が進出した地名とは解し難く、ゲリラ戦を抑圧すべく駐屯した場所を示したものであろう。

## (17) 漢書・兩粵

漢高祖は陸賈を遣はして趙陀を南粵王に封じて「百粵を和輯」（顔師は輯を集なりと註す）せしめ、刃害無からしめた。百越の名称は他にも散見されるが、越人散居の状態からかく呼ばれたもので、陀による建国が越人部落の糾合により成ったことは、云うまでもなからう。

## (18) (20) (21) (22) 史記・卷一一三・南越尉佗

## (19) 漢書・兩粵

(23) 史記・卷一一九・貨殖列伝に、南楚として予章と長沙とを衡山・九江・江南と共にあげ、予章は黄金を出だし長沙は連錫を出だす、とある。

## (24) 史記・卷三一・賈誼

また同書・貨殖列伝に「江南は卑溼にして丈夫早く夭す」とある。

(25) 江流域の予章より閩越の東冶（福州）に達する古代の通路は、詳しくは知り難い。南越滅亡後に漢軍が東越を撃つための進軍路も容易に考定し難く、ここに述べたのは推定に止まる。

(26) 松田博士は、この路を江中流すなはち荆と嶺南を通ずる大道と解しておられる。「禹氏の玉と昆侖の珠」（東西交渉史論・上）一九頁。秦の桂林郡が桂林に置かれたのも、先秦時代よりこの通路が開かれ、重要な地として桂林が繁栄していたからであらう。南越征伐の際に戈船將軍嚴と下屬將軍祖広明（漢紀による）とが、軍を分つて進んだことは、漢書・武帝紀にみえる。本文の進軍路はこれによって考へた。

(27) 徐松石氏著・井出季和太氏訳「南支那民族史」第十七章・嶺南の開拓・八、嶺南往時の交通・一九〇頁。本書は「粵江流域人民史」民国二十八年刊の和訳である。

(28) 韓千秋はわずか二千の兵を以て南越征伐の先鋒をつとめたが、越人に誘はれて深く入り殲滅された。（史記・南越尉佗）

## (29) (30) (31) 史記・卷一一四・東越

## (32) (33) 史記・卷一一六・西南夷

(34) 戈船には諸説があるが、干戈を載した軍船の意であらう。下屬（史記・東越）は漢書・兩粵には下瀕に作る。服虔は瀕を瀕とし、吳越にて之を瀕と謂ひ中国之を瀕と謂う（漢書註）と云へば、急瀕を下ると云う意味で命名せられたものであらう



(35) 史記・卷九五・朝鮮

(36) 上林苑内の昆明池は、元来、雲南省の滇王を討つために水戦の演習用に作られたものであるが、史記・平準書に「是のとき越は漢と船を用って戦逐せん欲したれば、乃はち大いに昆明の池を修め云々」とあって、武帝は水軍を以て南越を攻めんと決心し演習を行はせたのである。滝川龜太郎博士は、游観を為すに過ぎず、と解された（史記会注考証）が、贅し得ない。

(37) 史記卷三〇・平準

(38) 史記・南越尉佗

(39) 史記・卷一一二・主父偃

(40) (42) 漢書・兩粵

漢が南越国に対し輸出を禁じた品目、および南越国が漢に辺関の撤廃を願ったこと、いずれも趙佗が文帝に遣った書翰中に見えている。

(41) 趙佗の書翰に『もし（南越に馬牛羊を）予うるならば、牡を予え牝を与うる勿れ』と、老夫は群に処り馬牛羊の齒は已に長せり』云々とあり（漢書・兩粵）、匈奴に対しては、「もと馬の高さ五尺六寸、齒未だ平かならざるものと、弩十石以上は皆関を出すを得ざりき（漢書・昭帝紀の始元五年の馬弩関廃止の条に対する孟康の註）とある。

(43) 江上波夫氏「馬弩関と匈奴の鉄器文化」（ユウラシア古代北方文化）三一六頁。

(44) 唐詩選・卷三